

21世紀の言語研究

——言語はいかに文化とかがわるか——

高橋 道子

1. 序

20世紀はかつてないほど世界の交通機関が発達した。特に航空機の発達は世界を短時間で結び、世界中の様々な民族や言葉の違う人々が直接会ってコミュニケーションをとることが今までのどの時代にもないほど容易になった。更に最近のインターネットの発達により、直接人同士がふれあわなくても、情報の伝達は国境の差をなくして、世界のどこにいても即座に行くことが可能になった。このようなグローバル化した時代は更に21世紀に受け継がれてきている。それはますます助長し、世界は1つになりつつあるかのように見える。

しかし、グローバル化は全ての民族や文化が1つになることを意味してはいない。人々はそれぞれの文化と言語を持ちながらグローバル化の波に乗っている。民族、文化、言語の触れ合いはありながら、それはひとつに融合することなく、それぞれ独自のものを持ち続けている。又、異文化や民族の問題はいつの時代にもあり、現在も世界の多くの地域で異文化の対立や民族抗争が起こっている。

このような時代の中で言語のかかわる問題は大きい。今までの言語学は生成文法に代表されるように、科学で割り切れる言語の自律的な面を中心に考えてきた。しかし、様々な民族の行き交う、コミュニケーションのますます多くなる21世紀に於いて、これからの言語の研究は言語の自律的な面だけでなく、それを使用する人との関係を考えなければならない。それには、言語の背後にあるもの、そして人の生活と切り離すことのできない文化の概念を言語研究に取り入れることが必要になろう。今までにも文化と言語を結びつける研究はなされているが、両者を結びつける理論的枠組と方法論が乏しい。21世紀はこれらを確立し、文化の概念を入れた様々な言語の比較研究が重要になるだろう。

本稿は、日本と西洋の言語行動の違いを文化の側面から眺めていき、言語がいかに関文化に根差しているかについて論ずる。そして、文化が言語に及ぼす影響についての理論的枠組と方法論の必要性を主張する。そのため、日英語比較の時によく議論の対象となる西洋の「個」の概念が、西洋社会のどのようなところから出発しているのかを探り、また、それと対比される日本の「世間」を基準にした言語行動の枠組みを考察し、それらがいかに関文化に根差しているのかを論ずる。これにより、21世紀を歩み始めた今、新しい言語研究のために貢献できる方法をさぐる。

2. キリスト教と「個」の概念

西洋社会は民主主義、個人主義の発達した社会だと言われる。個人主義を形作る「個」の概念は西洋特有のものである。それはキリスト教と深くかかわっている。「個」とは神に対して一人一人の人間を指す。坂口(1996)は、西洋の「個」の概念は近代よりはるか以前、451年のカルケドン公会議から二百数十年にわたる「イエス・キリストとはなにものか」の問いに対する闘争の中から生まれたと考える。それが長い間に徐々に現れ、「漁師と大工の宗教」といわれるキリスト教が、貴族文化につきつめた価値転倒の挑戦も「個」の意識をもとにしている。

18世紀以降の西洋は、この「個」から発展した「個人主義」により啓蒙思想が発展した。Scollon & Scollon (1995)は啓蒙主義に於ける個人は、独立した理性をもった自律的な人と定義して、次のように述べている。

“The new Enlightenment concept of the human was to isolate each person as a completely independent, rational, autonomous entity who moves about through society according to society’s laws, just like Newtonian physical entities move about according to natural laws.” (pp. 100-101)

この「個」は、一人一人平等の立場に立って、神と対話ができる存在にある。しかし、啓蒙主義以降は、神のもとにひざまづくべき存在の人間が、神と同等の位置に立ち、更には神よりも高い位置に立って、神の視点、すなわち全体をみわたすことのできる高い場所に視点を置くようになったと

いう。Durkheim (1897) は「個」としての人間と、神との位置づけを次のように述べている。

「だが今日では、個人は、一種の尊厳を獲得し、自分自身よりも、また社会よりも優越したところにおかれるようになった。個人が罪を犯したり、またその行為によって人間としての資格を失ったりしないかぎり、個人は、すべての宗教がもっている、神から由来するあの一種独特の性質、そしていっさいの死すべきものを神から引き離すところの性質になんらかのかたちで関与しているかにみえる。個人は、宗教性をおびてきた。人は、人びとにたいして一個の神となった。」(p. 421)

更に、Lewis (1948) は神と「個」たる人間とのこの関係を裁判官と被告席にたとえた。そして、その位置の逆転、すなわち、現代は人が裁判官の位置におり、神が被告席にいと、次のように言う。

The ancient man approached God (or even the gods) as the accused person approaches his judge. For the modern man the roles are reversed. He is the judge: God is in the dock. He is quite a kindly judge: if God should have a reasonable defence for being the god who permits war, poverty and disease, he is ready to listen to it. The trial may even end in God's acquittal. But the important thing is that Man is on the Bench and God in the Dock. (p. 244)

Heimann (1999) も上の文を引用して、啓蒙思想後の西洋に於けるキリスト教の特徴、すなわち、神と人間の位置関係の入れ替わりを述べている。更に、村上 (1976) は啓蒙思想後のこの神と「個」としての人の立場の入れ替えを「聖俗革命」と名づけた。

個人主義は平等主義を生み、一人一人は独立した「個」となって、神の持つ高い「視点」を持つようになった。そこから生まれた啓蒙主義は、科学技術をはじめ、様々な芸術、そして言語にも影響を及ぼしている。「個」としての人間を中心に据えるものの見方は、動作主主語の多用をもたらし、動作主を主語化する傾向のある対格言語としての英語を特徴づけたのでは

ないだろうか。また、高い視点のものの見方は、英語に見られる絶対的時制となって現れている。「時制の一致」という文法現象は日本語にはない。井出(1998:68)は、「一般に英語話者は神の目で見えるように空から見渡しのきくところから全貌を客観的にとらえる視点を持って発話する。」と言う。

しかし、啓蒙主義後の西洋社会に「神」と「個」の立場の入れ替わりがあったとしても、それは神の存在を否定するものではない。「個」というのはあくまでも「神」あつての「個」である。神の教え、聖書の教えは西洋社会の中で絶対的な価値観を持っている。聖書を見ると、「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を述べ伝えなさい。」(聖書マルコによる福音書16:15)とあるように、キリスト教は宣教に力を入れ、世界中に布教してきた。聖書の翻訳の数は世界の数千の言語に及ぶ。その布教の手段は「言葉」である。特に「聖書」は、偶像礼拝を禁じるキリスト教では、神へ近づく手段として絶対的な権威を持ち、その中の言葉の価値は絶対的である。

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」(聖書ローマ人への手紙10:10)や「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」(同10:17)と述べられているように、キリスト教においては、言葉が重要なものとして扱われている。キリスト教を通した西洋の文化はこのように言語に対する態度にも現れている。

3. 日本の「世間」とは

近代の日本は、物質的、精神的にも様々な面で西洋のものをとり入れてきた。しかし、キリスト教を大々的にうけいれることはなかった。江戸時代のキリスト教禁止令に始まり、現在においても、日本のキリスト教信者の数は総人口のわずか0.8%('宗教年鑑'((平成13年版)文化庁編)である。これは韓国やその他のアジアの国々と比較してみても圧倒的に少ない数である。

日本にはキリスト教を持ち込まなくても独自に機能する文化があった。初期のイエズス会宣教師の本国への書簡の中には、日本は犯罪の極度に少ない国で、極度に貧しい者もいない、人々は平和な暮らしをしている、こ

のような中でどのようにしてキリスト教を布教するかがたいへん難しい、という記述があるという。

西洋に「神」と「個」の関係があるなら、日本には「世間」という物差しがあり、世間をつくっているのも人間である。人はこの中に入って、その物差しにかなった生き方をしていれば、安泰である。それに反すると世間から制裁をうける。「出る杭は打たれる」といわれるのはこれを意味している。「世間の目が気になる」「世間様に申し訳ない」などの言葉に見られるように、人々が考えるのは世間の要求する生き方をすることである。親が子供の教育をするときにも、人に迷惑をかける行動をしないようにすることを何よりも重視する。「世間」でのじょうずな生き方をしつけるのである。

このような中における言語行動は常に「世間」が物事の判断に立ち入ってくる。また、それは「神」のように、人と離れて行動の判断基準をつくっているのではなく、一人一人も世間の中に融合しているのである。ここには、「個」は現れづらく、英語にみられるような高い視点からみた言語形式は少なく、言語行動も世間の中の置かれた立場によって異なる。話し手と聞き手の視点は融合されて、敬意表現にみられるように、場面ごとの言葉の使い分け、コンテキストを考慮に入れる言語行動がおこる。

また、井出 (1992) は日本人の言語行動についてウチ・ソトの Kategorie を提示して次のように言う。

「日本人は、相手との関係で自分を規定し、それに応じた行動をすることを重視している。相手との人間関係の規定の仕方に、ウチ・ソトという二つのカテゴリーに分けるパターンがあり、その二つの領域をわきまえて行動することが一つの社会的ルールである。」(p. 50)

更に日本人の言語行動には、主語の省略、あいづち、話者交代のパターン、謝罪の表現、終助詞の使用など、英語とは異なった言語使用があり、これらは言語とそれを使用する人との関係なしには究明できない。ここからも文化と言語の関係が密接なことがわかる。

4. 差異のある世界

18世紀に始まる西洋啓蒙主義は、あらゆる部門に於ける科学技術の発展をもたらし、その影響は世界中に及んでいる。聖域と言われる人間の誕生や死に至るまで、人間の力でコントロールされるようになりつつある。このような科学技術の発展は人類に平和をもたらすものと考えられて来たが、実は人間の生命を脅かすものにさえもなると言うことが最近になってわかってきている。地球規模の環境汚染である。このような状況の中で、啓蒙主義とは何なのかを原点に立ってもう一度見直す時に来ている。

西洋啓蒙主義について、それ自体だけを見ても、なにもわからない。異なる他のものと比較してこそ初めてその意味が見いだせる。差異が意味付けをなすということは、ソシュール以来の記号論でも既に言われていることである。言語について言えば、当たり前だと思っている動作主主語の問題も、英語だけをみては何もわからないが、日本語、更に他の多くの言語と比較してみても初めてわかるものがある。

日本と西洋の文化的背景を見ても多くの差異が見いだされるが、世界中の異なった文化の背景を持った人々の接触がますます日常化する21世紀を迎えて重要なことは、それぞれの文化をよく知り大切に持ちながら、他の文化との違いを知り、他も尊重するという姿勢ではないだろうか。物事は差異があってこそ意味づけがなされる。全てが均質なものになってしまったら、その特徴も意味を失うことになる。多くの種類は人類を発展させる。

20世紀の終わり、分裂していたカトリック教会とプロテスタント教会が和解した。エキメニカル運動の成果として、カトリックとプロテスタントが共同で翻訳した聖書「新共同訳」聖書が普及してきている。これも、それぞれの立場を堅く持ちながら、他をも尊重するという姿勢の1つのあらわれではないだろうか。

5. 結論

グローバル化した21世紀という時代に、様々な文化が行き交うが、それぞれの持つ意味をよく知ることが重要である。よく意味を知らずに、他

の文化の一部のみ安易にとりいれることも危険である。西洋の「個」にはそれを形成してきた長い歴史があり、日本の「世間」についても、特有の文化的基盤の中にある。最近、日本人の「世間」という価値基準がうすくなり、「個人主義」という言葉が行き交っている。しかし、それは日本に入ってきて、キリスト教と結びついていない限り、本来の意味とは異なるものである。「世間」という価値基準を取り払って、「個人主義」のみとりいれることの危険性を考えなければならない。どちらの概念をも正しく認識し、それぞれの特徴を知ることが大切になろう。どちらも文化に深く根ざしたものだからである。

言語研究に於いても「文化」の概念をとりいれた研究が重要になる。それは言語の形式をみるのみでなく、言語行動の研究へと進んでいこう。そして、言語とそれを使用する人との関係が研究の中心に来なければならないだろう。文化の中で生活するのも人間であり、言葉を使用するのも人間だからである。それらの研究はそれぞれ比較することにより意味づけがなされるため、世界の様々な言語の比較研究が必要になる。これから必要なのは比較のための理論的枠組と方法の確立である。

参考文献

- 井出祥子 (1992) 「日本人のウチ・ソト認知とわかまへの言語使用」『月刊言語』
Vol. 21. No. 12. 42-53. 大修館
- (1998) 「文化とコミュニケーション行動—日本語はいかに日本文化と
かかわるか」『日本語学』9月臨時増刊号』Vol. 17: 62-77. 明治書院
- Durkheim, E. 1985 (1897) 『自殺論』宮島喬訳 中央公論社
- Heimann, Mary. 1999. Christianity in Western Europe from the Enlightenment. in “A World History of Christianity” ed. Adrian Hastings. Cassell.
- Lewis, C. S. 1970 (1948). God in the Dock — Essays on Theology and Ethics. ed. Walter Hooper. William B. Eerdmans Publishing Company.
- 村上陽一郎 (1976) 『近代科学と聖俗革命』新曜社
- 坂口ふみ (1996) 『〈個〉の誕生—キリスト教教理をつくった人びと』岩波書店
- Scollon, Ron and S Scollon. 1995. Intercultural Communication. Blackwell.

その他

聖書 新改訳 1970 日本聖書刊行会